



写真3 熱心な討議風景 (Syntec Biofuel 社にて)

補助金と蒸気(50%の蒸気を近くのパルプ工場に売却)、発電および回収金属の売却で経営は成り立っているようだ。ボイラー以外の設備は、スウェーデン、米国、日本等各国の寄せ集めで、運営はフランスの会社である。既に12年経過した古い施設であったが、中央制御システムや腹水設備の更新などをし、各炉連続運転が実現しているのは、予防保全を含めて維持管理の体制がしっかりしているからであろう。

3日目は、一転して州立のブリティッシュ・コロンビア大学(以下UBC)にあるベンチャー企業の研究開発の取り組みに関する視察で、アカデミックなものが多く、これからの可能性について大変熱心に説明をしていただいた。UBCのキャンパスは、6,000エーカーと信じられないぐらいに広大で、大学の施設整備や運営のためとはいえ、一般住宅の開発に土地を貸しているなどの思い切った経営の発想には、感心というか国情の違いを認識させられた。

最初のSyntec Biofuel社は、バイオマスから回収したガス等を高効率にエタノールへ転換する触

媒を中心とした技術を開発、研究している。従来技術と比較し、数段高性能な触媒との自負を持っていた。詳細は明らかにされなかったが、これから私募で資金を調達し、パイロットプラント(1t/日)の建設など次のステップに進みたい旨の説明があった。まだ、スタッフも8名の新しい会社であるが、日本もM-3やE-3等ガソリンへのメタノールやエタノールの添加が進められる見通しにあり、再生エネルギーとしてのバイオマスに期待する日本も、こうした技術が不可欠になると考えられる。ガス化技術を持つエンジニアリング会社との連携などを模索しており、早く実用化の域に達してほしいと期待する技術である。

次に訪れたXylon Biotechnologies社は、木質など植物系のバイオマスから有用成分を抽出し、その薬効等を調査する高度な技術を持っている。日本を主市場と考えており、日本人スタッフも採用していた。既に日本の会社とヒノキチオールなど商品化した事例を紹介していたが、今後も多くの薬効成分が商品化されていくであろう。カナダは森林資源の有効活用促進として、こうした基礎的な技術の研究に投資をしているとの事、余裕と

いか将来をしっかりと見据えた取り組みである。

3ヶ所目の、Dynamotive社は、木質などのバイオマスを流動床式ガス化炉で熱分解・ガス化し、冷却してバイオオイルを回収する技術を紹介していただいた。UBCに以前設置した10t/日のパイロット装置の実験を経て、技術的な検証を終了し、100t/日規模のプラントを建設中（2004年3月稼動予定）との事であった。pH2という強酸性のバイオオイルであるが、カナダ国内の水力発電より発電単価は安いとの説明には力が入っていた。団員にも興味ある技術であったと思うが、予定の時間を大幅に越えて質疑応答があり、同席された州政府の企業省の方も喜ばれていたと思う。日本でも類似の技術事例があるが、建設中の実機がスケールアップを含め、是非計画のランニングコストでトラブルも無く稼動することを祈りたい。

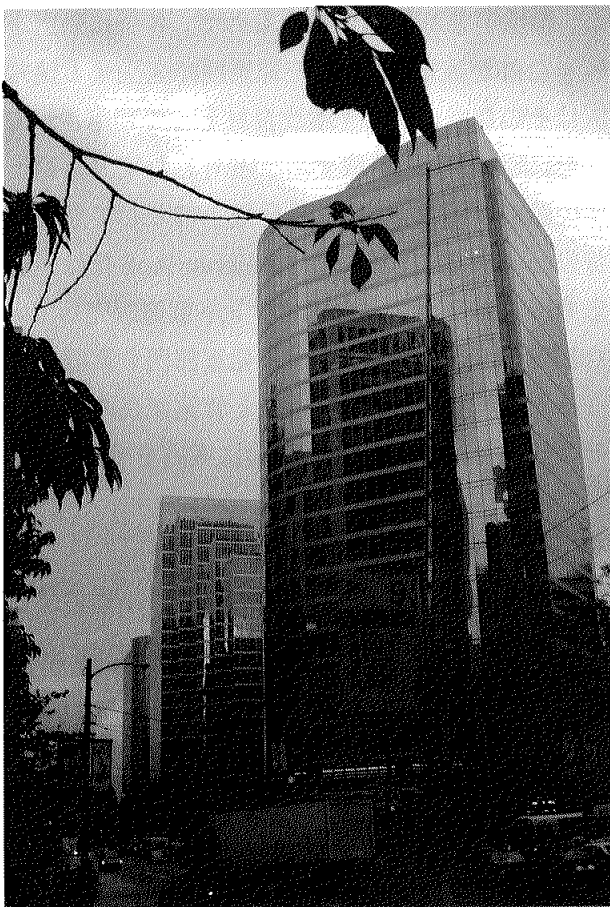


写真4 夕刻のダウンタウン

最後の視察が終了した日は偶然にも事務局田村室長の誕生日で、肩の荷を下ろしたこともあって夕食は皆で大いに盛りあがった。あとは、各団員ともそれぞれ興味の趣く所で英気を養ったことと思う。

帰国は10月10日（金）で、搭乗手続きや出国審査もテロ対策のため、何だかんだ質疑等があったが全員JAL017便で12時50分バンクーバーを後にし、帰国の途についた。成田にはやや遅れて、10月11日（土）の15時頃到着、無事を感謝し、再会を約束して散会した。

おわりに

今回の調査団は、女性の参加とともに若手中心のメンバーであったといってもよく、大変熱心な討議が訪問の先々であり、嬉しく思うとともに感心させられた。これからの各社および工業会の活動において中核的な役割を果たしていく方々であり、こうした若い方々が、海外の環境ビジネスに接するとともに、お互いの交流を深める機会が持てたことは、大変良かったと思う。

今回は、出発までに余裕が無く、訪問国は決まったものの、最後に対応が困難との理由でキャンセルになった訪問先や、参加団員の変更など事務局にはお手をかけた。しかし、萩原団長のもと、12人が良くまとまり、7日間の短い期間ではあったが、有意義な視察が行なえ、無事目的を果たすことができた。この場をお借りし、団長をはじめ各団員、事務局、芳野添乗員およびカナダ大使館、ブリティッシュ・コロンビア州政府の皆様へ感謝を申し上げます。